

平成30年6月14日(木)

老球の細道418号

第64回県高校体育大会、アップセット！

会津バスケットボール協会 室井 富仁

高校生にとっては高校生活最高の大会の一つ「県高体連」、通称「インターハイ」県予選、別称「引退ハイ」が戊申150年のわが会津の地で開催された。私は主管協会を代表して松井会長の代理で開会式の挨拶をするよう命じられた。このような公式の場で格調高い挨拶ができないので、コーチとして大会を前にした失敗談を話した。以下はその概要とプラスαである。

【高校生の試合は気持ちの持ち方でどこでどのようになるか予測不能である。負けるチームは、たいていは自滅するパターンが多い。相手チームは特に何も特別なことをやらないのに自分で自分にプレッシャーを与えて自滅する。

原因は二つある。一つは、名前負け。過去の成績、過去の順位で勝手に相手チームを過大評価してゲームに臨む。「20対0」からゲームをスタートするようなものである。ゲームが進行しているうちに、相手がそれほどでもない気が付いた時は、時すでに遅し。

実力は日々変化している。過去の成績と山本リンダも言っているが「噂を信じちゃいけない」。試合はやってみないとわからないのが高校生のゲームである。

二つ目は、練習で準備してきたことが試合で発揮できないことである。「練習チャンピオン」とか「稽古場横綱」などと言われる選手がいる。練習ではレブロン・ジェームスなみのすばらしいプレイをするのだが、いざ試合になると目が点になり、高倉健さんの無口スタイル、わが孫息子のようになアウェイで借りた猫のようにおとなしくなってしまう。練習を手抜きでやっていると、いざという時に自信喪失に陥る。「練習は試合のように、試合は練習のように」のバスケットボールの格言を常に思い起こさなければならない。

大会のゲームは自分たちの思うようにいかないのが普通である。思うようにゲームが開けない時、チームの流れが悪くなった時に頼るのは何か。ディフェンスとリバウンド、そしてコミュニケーションである。いずれもゲーム中に「やり過ぎ」てもコーチから叱られない、むしろ絶賛されるスキルである。

また、チームの状況が悪くなるとだんまりの状態になり黙秘権を使う。コート外で良く話す選手ほどコート内では高倉健さんに変身する。こういう時こそコミュニケーションの出番である。お互いの意思疎通を言葉で行い、悪い流れを断ち切らなければならない。親子でも昨今、何を考えているかわからない時がある。他人だったら尚更である。

終わりに、大会を盛り上げるためには、それぞれのチームが最高のパフォーマンスを発揮してアップセット(番狂わせ)を起こすことを肝に銘じて頑張ってもらいたい】

そしたら、今大会男女とも新人大会優勝の男子福島南、女子郡山商業が決勝で福島東稜、福島西に敗れアップセットが起こってしまった。言霊、言葉には魂が宿るのか？

大会後、福島西の渡邊拓也先生からメールが届いた。「敵は我にあり。最後までハンズアップしてしぶといディフェンスができました。ファールせず自滅しませんでした。東北、全国で選手が上手になれるチャンスを与えてもらいました。明日からまた頑張ります！」

チーム、選手、コーチには二つのパターンしかない。普通にやっているか、死に物狂いでやっているか。